

---

# 奇想天才

沙玖真 竜馬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

奇想天才

### 【ISBNコード】

N8862Z

### 【作者名】

沙玖真 竜馬

### 【あらすじ】

決して凡人でも普通でもない錐限奇抜と不登校だが家庭的な天才少女、非織江真奈。

真奈が奇抜と出会い、とある依頼をする。

この街で起こっている連續殺人を追つてくれないかと。

これはふたりの奇妙奇天烈奇抜な物語。

## 田舎じ（前書き）

作者は中一病です。お嫌でしたらブラウザバックを推奨致します。  
一部、改変する可能性がありますので了承下さい。

## 出会い

僕は退屈している　　とこりょうな書き出しの小説はいい感じはしないか？

そうかしないか。

僕なんて一人称使う奴なんてあまり見たことがない。

逆に言えば少しば見たことがあるんだが。俺としては僕という人称は使いたくない。

「俺は退屈している」よりは、書き出しの一人称としてなら僕の方が良いかもしないな。別に書かないけどさ。

現実問題として俺は非常に退屈している。どうじょもなく、日常生活を過ごしている。平和を謳歌している。

学生の本分は勉強です、よりも、学生の本分は青春です、の方が良いと思うんだ。

話の転換。どんぐ返しでの逆転劇ではないが。ところでさてさて、世の中にはこんなに事件があるのに俺には何一つ関係が無い。困つたものだ。本当、今日も平和だよ。

あー、そういうえば俺の唯一の友達、あいつは楽しくやつてんのかな？うん、絶対楽しそうだな。周りには楽しいことばっかりだしな。くそ、どこかでありきたりで陳腐でいいから殺人事件が起こらなければ、どこかであります。首を切られて入れ替わり。ま、起こらないけどな。そうそう、あんなご大層な理由ある殺人なんて起こるわけが無い。殺人に理由があることを推理小説家は大事に考えているようだが、全く理解できん。

大抵、人を殺すのに理由は要らないんだ。俺の知ってる殺し一番理由が無かつたのは、目の前にいたから殺したってやつだ。

それから、何故犯人は皆して人格者なんだ？

誰もイカれてない。俺が推理小説を全く読まないせいか、ドラマとかからしか情報がないせいかもしれないが。それはいい、続きだ。

皆犯人は探偵を生かす。何故？ よくわからん。残つてゐる全員を殺して、どうにかすれば大丈夫。

全員殺しきれば心配は無い。だけど生かすんだよな。

完全犯罪。

完全な犯罪は案外簡単だ。

考える限りはな。案外、ヘマはしてなくともなんか小さい証拠で見つかる可能性はあるにしろ、俺は可能な自信がある。

ああ、中一病な話じゃなくてな？ 現実的に、真面目な話。人を殺すのは簡単だが、人によつては、同時に酷く難しい。俺はどうなのかわからない。

こんなに長々となつてしまつたが、要するに俺は今英語の授業中で、かなり暇をしてる。だから中一病のような思考になつたんだ。

高三だけど。高一病か？

シャーペンをぐるぐる回す。放つて置いたら一周して落ちる。つまらない。イライラしてきた。

最近、人生がつまらなさ過ぎる。さつさと卒業したい。一応、日本の中学校は行つとくかつてことで通つてゐるんだが。卒業すれば、楽しい日々だ。辛いけど、つまらないよりはいい。

とりあえず早く、放課後になつてくれ。ラノベを読みたい。

授業終了まで19分。

時折、妙に不安になる。

俺の人生はこのまま何もないんじゃないかと。

多言語を学び世界の広さを知り深さも知った。

でも特別、世界が変わったとは思えない。

テンション下がる。テンション上がる出来事が欲しい。

そういうや英語のTensionには日本語のテンションの意味はない。本来の意味は緊張などを表す。

Tensionを聞いて思い浮かべるのは糸がピンと張った場面だ。

ま、和製英語だわな。

さて、授業は終わつたし帰るか。

### 『三年B組。錐限。図書準備室まで来なさい』

何だつて？ 図書準備室？ まあいい。行けば解るか。

図書室は一階。当然、図書準備室は同じ階。ここは二階。教室を出て、喧しい廊下を抜けて階段を下りる。全国的に有名な進学校だが騒がしさは普通の学校とあまり変わらない。変わるとすればずっと勉強しているやつとちょっと友達と話すやつに一分される。

階段を下りるのが面倒なので踊り場から飛び降りても平気だが、目立つからやめておく。日本人としてそれはいけない。出る杭は打たれる、が日本なんだから。個性をなくしてナンボだしな。

ということで普通に降りる。一段一段。丁寧に。意味も無く。何も無く。そんなこんなで図書準備室。

とりあえず、扉をノック。

「失礼します」

礼儀として言つておく。本心はどうだか。

「ああ、ああ。よく来たね。来ててくれた。まずはお礼だね。ありがとうございます。サンキュー。サンクス。他にお礼を言つて欲しいかい？」

「いいや

「よろしい

何だこれは？

ああ なんだ天才か。

天才と出会うと天才に嫉妬するというが普通は天才に嫉妬はしない。ステージが違うんだから。

少年野球とメジャーリーグ。

ラジコンとF1。

ヒトとライオン。

人間と神。これはちょっと誇張。

でも負けて当たり前。嫉妬するのは間違っている。

嫉妬ができるのは同じステージにいて、自分より少し秀でた能力を持つている人物に対してだけだ。ちなみに、親友も天才だ。頭じやなくて、身体能力、格闘ではなく殺傷センスが抜群にいい。強すぎる。嫉妬はしないしできもしない。

「それで？ 三年生でありながら、この学校唯一の十四歳の天才がたかだか凡人に何の用？」

靡く鴉の濡れ羽色。

彼女を見てイメージした言葉はこれ。

いやはや、ずいぶんとまあ奇麗な髪だな。それにおっそろしく長いから手入れが大変だろうに。

低身長で何故か学校指定のたばたばのジャージ。一五〇センチあるか？いやないな。反語になってしまった。

あと、俺が凡人なのは少ししか間違っていない。正しい過剰訓練によつて、ある程度のやつなら勝てる程度だがな。

「君が凡人か」

「俺は凡人だ」

「自己評価が低いな。日本人の典型だ」

確かに日本人は自己採点をすればほとんどが赤点だがアメリカ人は満点か90点以上がザラにいる。

高すぎるのもどうかと思うがな。

「悪かつたな。じゃあ、言い直そう」

何故、一生徒にすぎないこの天才が放送を使って俺を呼び出した

かはわからない。だが、俺のことについて何かは知っているのだろう。ならばこのくらいは言つても問題ない。これくらいなら調べれば出てくる。

「俺は凡人だが。そこいらの奴よりはほんの少し違う。『ご満足？』

「うん。自分に自信は持つべきだよ。錐限奇抜くん。本当、君は名は体を現すを体现した存在だね。奇抜だね、奇抜だけに奇抜だ。発音はこれであつていいかな？」

「もう少し名前っぽくな。平板に発音してくれ。最高にアホな名前だろ？ 奇抜な名前だ。文字通り、な」

奇抜な名前に両親はしたかったんだろう。だからって安直過ぎやしないか。

「そうかい？ 私は最高に奇抜でいい名前のように思えるけれど？」

「そりやどうも。そつちの名前は？ 知つてはいるが、迷惑じやなければ名乗つて欲しい」

良い名前ね……。天才は感性が違うのか？ そういうや、親友も良い名前とか言ってたな。なんだ？ 天才君は俺の名前が良い名前に感じるのか？ あ、わかつた。頭がおかしいんだな。

「ああ、これはうつかりしていた。すまない。礼を失していた」

居住まいを正したがジャージだからなんだか滑稽だ。

「私の名は、非織江真奇奈。ふふ、奇しくも。同じ字が名前に入っているね？」

奇しくも、を強調する。

「ああ、そうだな。奇しくもな」

デウス・エクス・マキナからか。機械仕掛けの神ね。確かに天才には相応しい。

まあ、強制的に物語を終わらせるという意味も入つていてる筈だが。

「さて、本題だが。ある事件と一緒に追つて欲しいんだ」

デメリットを考える。特になし。時間くらいだ。ならば、構わない。当然だがメリットさえあればビジネスは成立する。

「…………報酬は？」

「ふむ、そうだな」

考える素振りをする。他人の嘘を見破るのは苦手だが恐らく、嘘は見てとれない。なら、考えていなかつたのか。馬鹿か？人を雇うんだから、報酬くらい考えておけよ。

「……使いようによつては莫大な富を生み出す、ではどうかな？」  
「使いようによつては、という事は使い方を誤れば膨大な損失があるようにならうが？」

「悲観主義なのかい？そういうわけではないよ。例え君が使い方を誤つてもそれが修正してくれる。そうだな一ヶ月あれば確実に億はいけると思う。手段を選ばなければ」「

「穩便な方法でそれを使うとしたら？」

「とりあえず、最短最低限でマイホームを買う程度は稼げるよ。君は案外用心深いな。もしかするとそういうわけではなく、単に機械的作業のようにそういう風に見えるようにしてゐる可能性もあるけどね」

いやいや、俺はそこまで命を捨てちゃいない。

「全く持つてすまんな。俺は臆病なんだ」

「ふふ、面白い冗談を言つね？君が所属している組織の人間でしかも組織内でかなり危ないグループにいた癖に。もう少しスマートに行こう。私はこれでも天才と呼ばれているんだ。君は頭は悪くない。精神がぶつ壊れてるのに無理して普通を装うことは無いよ。臆病、ね。そんなものどこかに落つことしてしまつたろうに。君は、こここの試験で本来なら百点を取れる。だけど、昨日本を読みすぎたし眠いから八十点でいいかと、努力してきたものを馬鹿にするような人間だろう。ああ、反論は聞きたくない。君は今までのテストで合計点数を君に関係ある点数にしてきたらうに。誕生日の倍数。所有する車のナンバー。バイクのナンバー。親友の誕生日、その親友の妻たちの誕生日の倍数他など。ところで君の親友はすごいモテるね？」

長々と一気に喋りやがつた。どれに返そつかな……。

「俺は謙虚なんだ　日本人だからな。オーケー、スマートに行つてやる。それから、努力をしている人間は素晴らしい。努力ができる人間は素晴らしい。テストで赤点を取るのは単なる勉強不足だ。教師のせいにするんじゃない。そう思つているが？俺は別の時間。他の場所。密度の濃い努力をしたからだ。それから俺の親友はモテる訳じやない。都合よく、ヒーローのように女性のピンチに駆けつけるんだ。だから格好良く見えるだけだ。あいつ自身は人間としては底辺だよ。ヒトとしては至高だけどな。非織江が長々言つちまつたせいでこっちも長々だ」

疲れる。勘弁してくれよ天才。

「質疑に応答してくれて感謝する。それで、依頼を引き受けてくれるかな？」

「事件を追うのはいいが、概要是？」

「引き受けてくれたなら教えるよ？」

チツ、面倒だな。俺は日々が退屈だから、というのは知つているだろうに。俺の名前も知つているんだから。

こちらの興味を引かせ、完璧に依頼を引き受けるようにするつもりか。

「……引き受けよう。但し、俺に直接的または間接的な攻撃は加えないこと」

まあいいさ。受けてやるよ、クライアント。

「了承したよ。頼むよ、錐限くん」

「そうだな。よろしく、非織江」

非織江真奇奈。十四歳。一人っ子。父と母と非織江の三人家族。核家族だな。経歴、七歳で渡米。十歳で北アメリカ連邦政府の元ア

メリカ合衆国領土の名門大学を首席で卒業。十三歳の頃、日本へ戻り、日本の試験的な飛び級プログラムに参加。唯一彼女に合った高校がここしかなかった。私立五月雨高等学校。ここは完璧点数制の学校だ。単位は全て点数で、出席日数、授業態度などが一切問われない。早い話学校に来なくていい。流石にテスト以外の行事で来ない人間は一人しかいない。

錐限奇抜こと俺は、家でやることがゲームかDVD鑑賞会もしくはラノベを読む、くらいしかないので学校に来ている。前述の通り俺は退屈が嫌いだ。

そして、非織江真奈は一般的に言えば問題児なのだ。彼女は小学校だろうが中学校だろうが学校に通つたことがあまりにも少ない。両手で足りる日数だ。足の指はいらぬ。

大学もどうやって卒業したのか不思議だ。けれど、そんな疑問を投げかけたところで意味は無い。なんせ卒業しちゃってるもん。結果的に。

非織江は特別扱いされてる。一〇の階には空き教室がある。三年は全部で五組。A組、B組、C組、D組、F組、の五つ。空き教室はF組だ。少子化の煽りを少し受けて各学年四組しかない。この学校が普通科しかないせいかもしれないが。他の学校は全科合わせ六組はある。だが、生徒がいるのだ。たった一人。非織江が。彼女が人とできるだけ接触しないということに学校側は配慮して、非織江一人のクラスを作つた。担任は校長だ。ただ、彼女が来なかつた。それでも、文句は言えない。なぜなら点数制だから。

ということで飛び級をして、俺と同じ学年で来年卒業というわけだ。点数制だからといって即卒業出来るわけではない。学年は飛び級できるが卒業はできない。日本ではテストを学校側に受けたいと申請すれば大抵は受理される。受かれば、それで簡単飛び級。定期テストが無いわけではない。一年に二回定期試験がある。それを早めたり出来るが遅めたりは出来ない。

彼女は入学時一気に入試と一年と2年の合計五つ試験を受けた。

卒業試験だけはやる日にちが決まっているため出来ない。つまり、3年になると申請しても一つの試験しか受けれない。三年になった日に三年生前半の試験を受けたらしいけど。

彼女はあと数ヶ月、ここで燻つていなければならぬ。もう卒業でいいと思うが学校側としてはたつた一日で学校を卒業されちゃたまつもんぢやないからな。名前を売る必要があるし。ウチの学校にはこんな頭の良い生徒がいるんですよ、だからお子さんを是非ウチの学校へ、つてな具合に。

非織江真奇奈。面白いプロフィールだな。

閲覧しているページからログアウト。薔薇と雨雲のロゴが表示され、終了。パソコンも終了操作に入る。

申請して受理されるって、テスト作る先生方大変だな、と思ったか？ ところがどっこい。テスト内容は「コンピューターがカリキュラムに沿つて前期なら前期の授業範囲からランダムで作ってくれる。だが、授業範囲がわからなくとも、勉強が出来れば範囲なんて気にする必要は無い。俺も眠いと学校来ないし。こここの学校自由すぎで困る。制服はあるけど着なくて也可だし。髪染めていいわ、ピアス付けていいし。ちなみに俺はあんなチヤラ男とは違う。調子こいたとかではない。読んで面白かった本の主人公がピアスを付けていたから、憧れた。馬鹿みたいな理由だけだな。

でも、正直ピアスつて寝る時邪魔くさい。慣れたけどさ。そうまでしてピアスを付ける理由はない。無いんだよ。

俺はどちらかといえばオタク、かもしだれないな。趣味にしか金は使わないしな。

彼女もいたことないし。

いわゆるリア充でオタクを気取つてゐるわけでは決してない。学校ではぼつちだしな。

要らないけどね？ 友達は、親友が一人いれば充分だ。

趣味はエロゲー。確かにその辺は日本に戻ってきて嬉しいけどさ。

日本文化万歳、つてな。

話が変わりすぎた。まあいい。今は学校からの帰り道。歩きで十分のところにある一軒家に住んでる。両親は既に鬼籍に入った。親友の親父さんから金とかもらってる。家とかはともかく学費くらいは自分で稼げたと思うんだが。

「ん、携帯が鳴ってる。

「ハロー？」

「ハァイ、元気してつか？」

英語で話しかけられたんでスイッチ切り替え。同じく英語に。

「ああ、調子は上々だ。そうだ、相談があるんだけどな」

搔い摘んで非織江について話した。

「ふーん、別にいいじゃねえの？ 支障が無きや」

「困難なほどあるわけじゃない」

「それでさ」

「兄様！」「おーい！ あはは、早く来なさい！」「何、してるの……？」「わかった、今行く！」

後ろから聞こえてくるのは日本語だった。

「すまん。妻たちが呼んでる」

楽しそうだな。後ろの音から察するに私有してるビーチにいるな。楽しそうで何よりだこんちくしょう。

「別に良いさ」

「もうちょい話そうか、それでさの続きなんだが。恋人作んないの？顔は良いんだし。童貞じゃないけどキスがしたことが無いというおかしな男になつてるぞお前は」

「くたばれ。つーか、相手がいない」

「今話してた非織江でいいじゃん

「14歳だぞ！？」

「だから？ 愛に年齢は関係ないって、血の繋がりさえもな。要するにハートだつて。あ、もつ行くから。そろそろ怒られる。グッバイ、奇抜」

「じゃあ……」

「ブツつ！」

「…………あいつめ」

途中で切らんしてくれ。

今のが俺の親友だ。色々すごいやつだよ。ハーレム構築したり。  
親父さんさえもハーレムだつたり。兄弟もハーレムだつたり。

兎にも角にも結論として、あいつは俺の自慢の親友だよ。底辺とか言つたけどさ。至高とも言つたけど。

そう言つた理由はある。あいつは日本の法律に照らし合わせれば十桁分死刑になつても足りない、はずだ。

だけど、ヒトとして強すぎる。ヒトを日本語でこう表記する場合は、動物としての人を指す。あいつは本当に強いんだ。獣のように強い。人間ではないみたいに。他の人間 獣のように考える。

あいつに罪悪感は無い。塵屑じんじやくを踏み躡つて何が悪い。そういうやつなんだ。

それ故に、最低にして最高。人間として強いから、至高。人間として屑だから、最悪。

## 出余い（後書き）

さて、如何でしたでしょうか？  
もし、嫌いならば好みに合っていないのでしょうか。合っているようでは  
したら感想等を頂けると大変嬉しいです。お願い致します。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8862z/>

---

奇想天才

2011年12月27日22時52分発行